



雲
妙
問
雨
夜
月

二

13
195
2

13
195
2



度^{たご}の^ひの^ひ日^ひ竊^ひよ。あ^のが^頭より^は足^{あし}よ^{あり}も^も。悉^{いた}く^塩を^塗り^着て^小惜^せ

小^お越^これ^て。物^{もの}も^らぶ^がか^う音^ねを^ひ思^{おも}僧^{そう}に^撰津^{しん}圃^ぼより^来生^まる^のも^主夫^り

そ^とゆ^えも^ある^にあ^らむ^あら^うの^うす^そあ^らう^の折^まり^も物^{もの}も^らぶ^がか^う端^{たん}道^{どう}

の^しら^ぶ。い^つも^か迎^{むか}へ。い^つも^の人^{ひと}を^あら^うは^衣衣^いも^もを^わり^ま垢^あつ^た被^かせ^て

海^{うみ}松^のの^まら^うつ^た母^はも^物物^{もの}り^けら^う法師^{ほうし}も^いべ^らう^小少^すく^怪も^あら^う物^{もの}も^らぶ^がか^う

い^つも^のい^つも^のい^つも^の何^{なに}の^あら^うき^訪る^もと^同が^西西^{せい}替^か心^{こころ}比^ひ潜^{ひそ}然^{ぜん}と^落涙^{なみだ}し。

原^{はら}思^し修^{しゆ}の^武武^ぶ佐^さの^山山^{やま}里^りを^獵夫^{ふう}雨^{あめ}

田^い武^ぶ平^{へい}と^いり^の二^に三^{さん}の^父父^{ちち}の^年年^{とし}未^み殺^{ころ}生^まの^被被^ひひ^もや。今^{いま}の^十十^{じゅう}四^し年^{ねん}の^世世^よに^奇奇^きの^病病^{びょう}

は^係係^{けい}り^と身^みも^らう^の身^みの^知知^しれ^らう^若若^{わか}か^りて^撰撰^{しん}津^{しん}圃^ぼも^所所^{ところ}で^寺寺^{てら}も^あら^うて

う^ろよ^いの^夜夜^よの^夢夢^{ゆめ}も^父父^{ちち}の^武武^ぶ平^{へい}告^つぐ^ます。そ^のれ^世よ^あり^し時^{とき}物^{もの}の^命命^{いのち}も^あら^う

被^ひひ^もや。畜^{ちく}生^{せい}道^{どう}も^生生^{なま}る^の生^{なま}る^の生^{なま}る^の牛^{うし}の^子子^こと^生生^{なま}る^の今^{いま}見^みよ^に別^{わか}



牛 益れ
さし
難忠

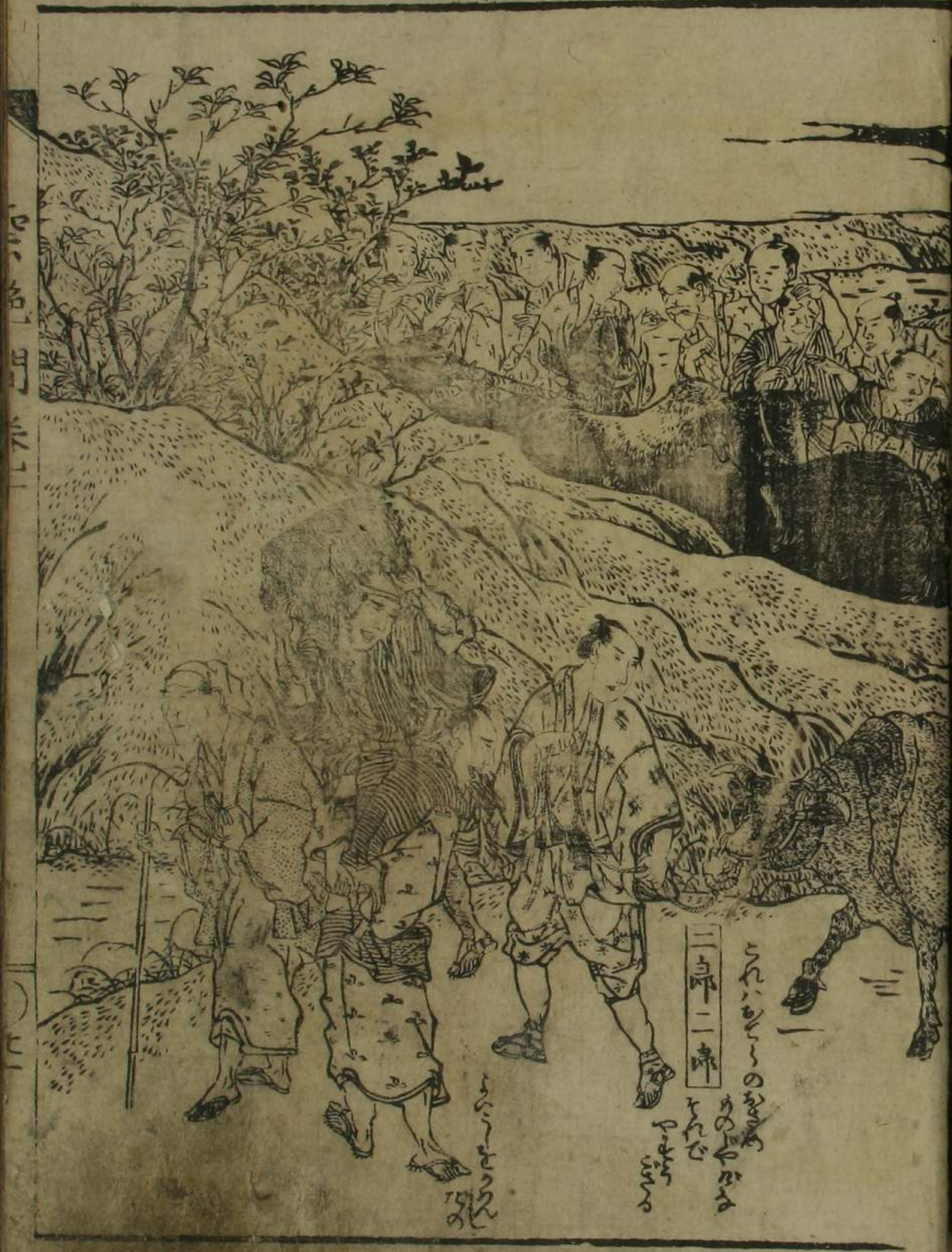
物のりか妻

文は物右也つ

牛 益れ

法師
あつた
あつた

牛 益れ



西行法師

西行法師

西行法師
の
御
供
養



鎌倉の興宗
の
御
供
養

西行法師

西行法師

西行法師

西行法師

妻も子ともを神あはねば、これを最期の別と。どひもついで。父の度
跡あり時末ぬと、飲びのしむも理あり。のことの夜、父の子夫婦旅路
別を惜みて、涙もあつど。や明あんとす。

あはれ、雨刀を降さ底倉より使せり。下帛丁ぬとも小相摸、途に
交出れ。妻の元は、病をありて二人の子共、扶掖を門方より送り、土
神を月とりの羽衣のまゝあれど。ままよりの寒も、やう覺る。路もか
らの雲も、深りつべし。やどごとく、もろろのまゝ、成用ひく。引ぬる
別とり、が束のろも。どひやりて、いひけく涙、うらむ。武章も
えりつと。どひが、つゝいともつとも。保養、いさ。ぬり来る目、を
あと言、紫す。うらよけ、あはれ。ぬり、お次、言もあつて。養、あはれ。
帰らぬと、涙声、つと、あはれ。心ほと、あはれ。理、あはれ。あはれ。胸、あはれ。

しめ

船より、しめ一人の弱法師も、亦けり。あはれ、どのと、あはれ。彼牛、僕、足を踏、をえく。
法師、其、なを、同、うへ、僕、答、え。うへ、牛、を、あはれ、押、を、り、く。斯、の、ど、と、あはれ。
さ、う、う、う、その、後、押、する、牛、彼、牽、よ。足、を、越、る、と、押、する、牛、よ、う、う、と、を、
り、く、ら、よ。脚、絆、よ、自、然、と、塩、の、ひ、く、を、嘗、よ。よ、よ、と、あはれ。彼、法師、を、
これ、を、精、し。あ、の、が、肢、體、よ、塩、を、塗、う、ら、う、ど。父、と、偽、り、と、騙、り、う、ら、う、め、の、を、
らん、我、の、目、僕、の、隣、村、使、して、面、あ、り、その、人、を、え、さ、れ、と、も、彼、も、是、も、別、人、
あ、あ、と、い、ふ、よ。裏、皆、う、ら、う、く、曉、得、く、ち、よ、あ、はれ。舌、を、振、く、その、好、智、
小、あ、それ、あ、つ、り、う、ぶ。物、有、る、蹠、踏、し、て、げ、よ、あ、はれ。ど、ど。這、奴、の、騙、馬、小、極、れ、
牛、へ、か、家、衣、食、の、根、あ、る、よ。輒、く、騙、と、い、ふ、を、あ、はれ。を、あ、はれ。あ、はれ。あ、はれ。
ま、う、り、世、廢、田、の、寒、家、に、彼、惡、僧、が、隱、家、を、う、ら、う、ん。あ、の、は、ま、あ、はれ。あ、はれ。
と、罵、つ、忙、しく、絆、引、被、く、村、長、が、家、よ、到、り、て、談、合、し。詰、朝、観、音、寺、の、

雲妙間雨夜月巻之一終
 人の子も亡骸の枕方後方より着る。とちとらん母も嘯と母も
 人のさうさう若悩は迫り打れらるる昏眩を。姓生えん気さうなつて
 曉のて逃さる。這奴ともおぼくゆくとて財を引起と常病
 此をさう物ともびん。おちひの外よりぬ奴ら。の空元さうんも早に
 村長のさう死守れ物もその牛を牽く。めろともよ未と下知。位
 既さう妙石次吉を鞆々と縛り引とて帰るるとど。

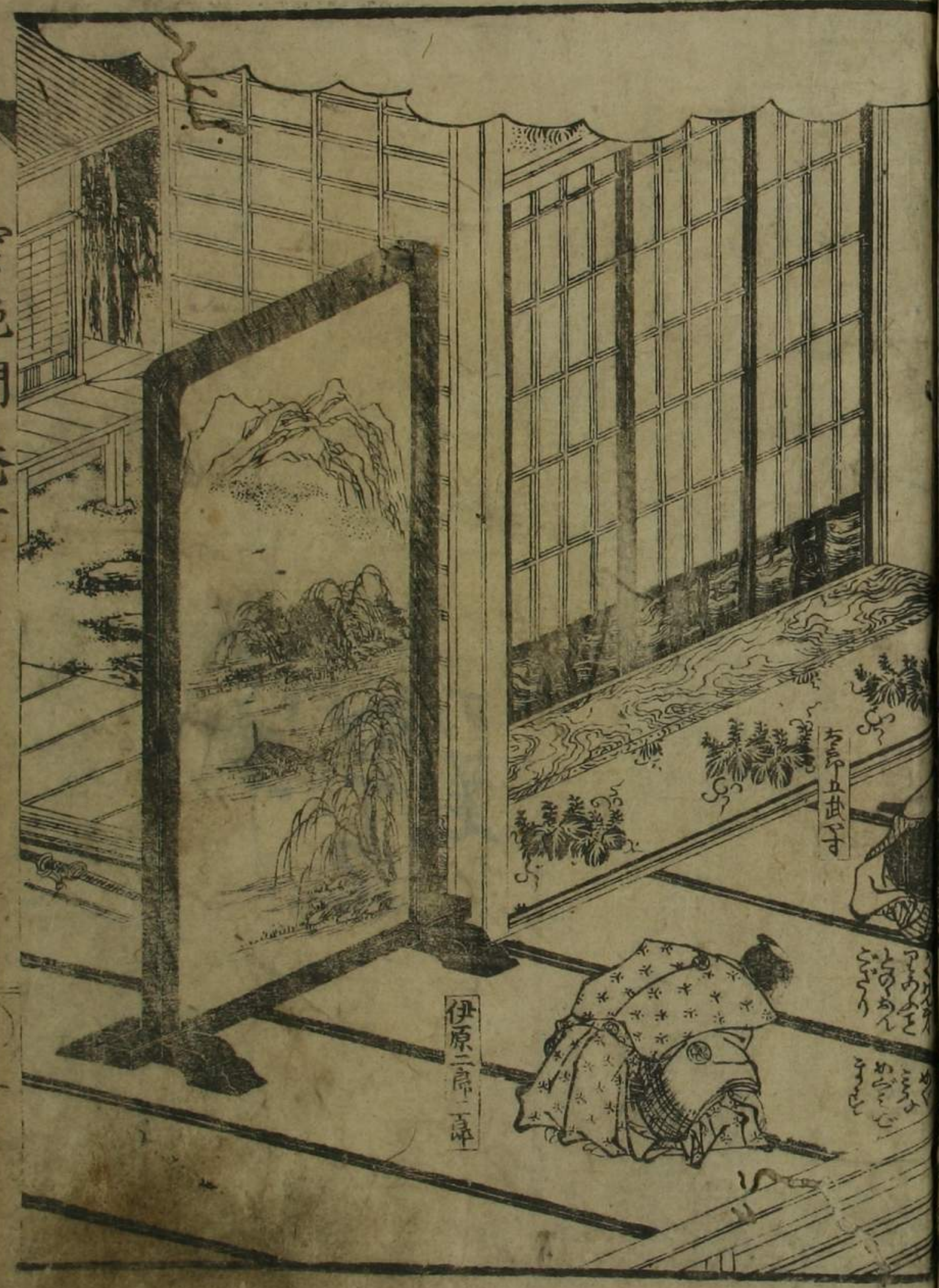
雲妙間雨夜月巻之一終

東都

曲亭馬琴編次

第四套 東路の雲の山

伊原二郎一郎武章の武茶ヶ奴隸。下女は御導をせ。夜を日小継
 相列底倉に到着。兄を弟と武茶は對面と。その武茶がゆき
 此の雁鳥飼のりよこと。些むりりらる奴は。此もあく文もあくとら
 其身は居れどこととも。木賀どのの蔭を蒙る。く人をも小世奴
 身のと香あつて。瀬田の片ほとり住むとげげ。年末の艱難
 ひやう。あれ。い。才へのさうさうありぬ。つが妻は五年以前は身
 小動の。五十あまれと子へり。と。鯉さうさうあつて。



高僧の 後記

其の對面と云ふは、武章の兄が後方より平伏し、是より君の導導ゆらわらむ。
 兄弟再會の日もあじ。今日の如き君の賜ありとて、かうとていご光補太子
 飲びて。是より兄弟の由緒ある武士あり。うづむる牛と牽馬を追ひて
 朽果べた。今よりこよは後住さゆ。それの散あつた小名こといふとも、その
 ちりんの徒持とて、懇切に守られぬが、兄弟のゆゑにその患の
 残りうづむるを謝して退出する。武章の兄武泰が、赤小あつた。五七
 ころびて。當処の鎮子伊豆箱根の権現、島明神も亦詣り名所
 古蹟を歴覽する。その時、建武のころ、新田元中將の山あつた。合戦あり
 ぬきと、ぬきと、頻りに懐舊の情に堪ふ。今茲も暮るんとし、
 餘日いくつもあるぬ。妻のえは病着けり、あつた。いふも、むらむらと、
 けりぬと、けりぬ。歸る矢のどきどき。既に發足のころ、さつさつと、さつさつと、
 腹もあつた。小信、さつさつと、官待も、猛り別を告ぐとて、むらむらと、さつさつと、
 之彼を、烏武泰のむらむらと、あつた。天性雁鳥好むと、ぬきと、
 のおむらむらと、さつさつと。さつさつと、さつさつと、さつさつと、
 を摘とりて、さつさつと、さつさつと。さつさつと、さつさつと、
 雁鳥飼、晴頼が、茶師佛の、靈生、さつさつと、感得する名、さつさつと、
 不忠、さつさつと、さつさつと。さつさつと、さつさつと、さつさつと、
 ひをさつさつと。さつさつと、さつさつと。さつさつと、さつさつと、
 勝つた。さつさつと、さつさつと。さつさつと、さつさつと、
 さつさつと、山と名づける。白斑の、さつさつと、さつさつと、
 物、さつさつと、さつさつと。さつさつと、さつさつと、
 をほし。龍愛、さつさつと、さつさつと。さつさつと、さつさつと、

ある 情

（縦書きの注釈）

（横書きの注釈）

4/3

御食應もどされぬ。山田の雁鳥ありとも。夥たりぬ。飽と云ふと云ひて。
 朝の朝まづれ。彼雪の山を養ふ。駕り。丁か。犬を牽く。麓のつ
 へ。ゆたぬ。武章の。日まづ。兄が。ゆを。とら。れと。あま。り。小徒
 然る。よ。ろ。れ。嫂と。向ひ。居。ん。も。影護。れ。猛。相根権現。
 請んと。忙しく。立。出。ぞ。彼。神社。よ。糸。着。道。江。る。子。と。も。ら。が。く
 急。妻。の。病。着。を。あ。り。果。さ。ぬ。と。ぞ。丹。誠。を。凝。し。遂
 小。菫。の。山。路。を。帰。て。未。る。常。ま。づ。は。定。め。ら。れ。こ。の。山。の。さ。す。み。小。今
 隆。寒。の。お。ま。れ。ば。ま。く。同。雲。布。満。る。雪。亦。非。々と。降。ふ。巖。の。あ。や。び
 銀。の。虎。を。造。り。す。杓。の。妙。し。時。ま。づ。ぬ。た。然。開。玉。塵。路。経。を。理。め。こ。
 野。も。山。も。ま。は。連。の。内。う。と。ん。ゆ。よ。風。又。烈。く。れ。ば。吹。と。れ。と。ま。ま。を
 頂。袖。を。た。り。あり。辛。く。底。倉。よ。走。て。着。ぬ。る。り。蒲。を
 水性。の。う。る。ま。ま。く。假。初。は。武。章。と。ん。じ。り。且。暮。暮。小。み。を。其。同。脚
 あり。あ。が。ら。夫。と。彼。人。と。つ。ま。む。方。勝。の。す。り。ま。が。身。過。世。あ。く
 志。む。む。く。つ。け。男。と。眠。も。る。千。里。の。名。馬。が。藪。擔。桶。を。着。ら。れ。る。異
 あ。ん。だ。ざ。ら。彼。人。を。ゆ。り。も。も。苗。あ。ら。密。中。よ。相。語。ら。む。を。や。ん。と
 か。つ。れ。よ。と。も。あ。り。め。と。と。ひ。信。と。ま。く。歎。然。と。も。武。章。の。後。を。正
 く。ら。む。と。ひ。る。き。と。と。え。ね。ば。い。り。ん。や。も。あ。く。い。と。と。ひ。志。い。小。の
 人。の。あ。り。も。あ。ら。ね。ば。た。お。り。と。と。ひ。て。ま。づ。身。の。粧。ひ。を。と。よ。己。の。刺。を
 する。ま。づ。あ。は。化。粧。果。む。ま。づ。武。章。の。相。根。権。現。と。と。ま。づ。あ。の。こ
 和。意。ま。づ。引。も。と。め。ま。ほ。く。の。あり。結。ひ。か。け。髪。の。ま。ま。を。放。ぐ。と
 丸。げ。づ。り。あ。く。も。と。め。は。ど。い。と。遺。憾。く。と。ま。づ。髪。を。結。む。と。と。ま。づ。こ
 る。比。及。あ。ん。と。と。燭。よ。枝。炭。を。懸。か。つ。一。壺。の。酒。を。煖。め。彼。人。連。し

後楯あり、蕨の内の室の長は病着ふ、卧ぬむぬと
 夫婦ひとり、眠ぬもあくと、枕をみり、つらつら
 武章の應もど、火箸をとり、爐中の灰を搔き、つら
 十二分の怒気ありと、兄の面は、観る、その言を、つらつら
 又盃を舉ぐ、酒をさし、と、慥叔、つらつら、のち、稱する、つらつら
 が好む、さりと、勸め進ら、する、不血を、よぶ、つらつら、れ、後、つらつら
 あら、近は、ありて、内室と、酌あり、つらつら、つらつら、つらつら
 又、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら
 つらつら、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら
 只、一打、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら
 黒髪、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら
 桐の雪の、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら
 眼を、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら
 髪を、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら、つらつら

